

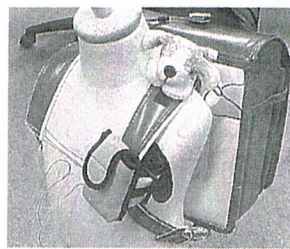
筑波大学の中内靖准教授らはかばんなどに取り付けた小型装置を使い、子どもの登下校を見守るシステムを試作した。全地球測位システム(GPS)を使った既存品は位置情報しか得られないが、新装置はカメラやセンサーを組み合わせて行動履歴や映像情報を把握し異常を察知できるようにした。犯罪被害抑止対策用に1年後をめどに実用化を目指す。

登下校時の異常 行動履歴や映像で把握

試作したシステムはランドセルやかばんに小型カメラと加速度センサーなどを取り付ける。写真。定期的に周辺の様子をカメラで撮影し、GPSで位置情報を確認する。撮影画像と位置情報のデータは携帯電話などを使いインターネット経由でサーバーに送信して保管。保護者と警備会社などが確認できるようにする。

子どもの歩行や階段の

筑波大、かばんに監視装置



上り下りなど普段の行動時のデータをあらかじめ登録しておき、揺さぶられたり手を引っ張られたりした際は加速度センサーが異常振動と判定するようにした。すぐにカメラで現場の映像を撮影すると同時に位置情報特定し、監視している警備会社に連絡する仕組み。子どもが通学領域を大きく外れて行動した場合や、事故などでシステムに衝撃を受けた際にも同様に連絡する。カメラをランドセルの外側など一目で分かる部分に取り付けることにより、犯罪の抑止効果も期待できるとしている。

(つぐば)